

遅効性薬剤に対応したヒラズハナアザミウマの薬剤感受性検定法の開発

～ヒラズハナアザミウマ防除の精度向上に向けて～

アザミウマ類の殺虫剤感受性検定法は、これまで処理2～3日後の速効的な効果を評価しており、遅効的に効果が発現する殺虫剤を評価することができませんでした。そこで、ヒラズハナアザミウマを対象として処理7日後までの評価が可能な感受性検定法を開発しました。

1. 背景と目的

ヒラズハナアザミウマは果菜類、花き類の重要害虫です(図1)。奈良県では主に、イチゴの果実褐変やトマトの白ぶくれ症状、バラの花弁褐変などの被害が問題になります。防除には主に殺虫剤が用いられますが、薬剤によっては効果の低下がみられるため、定期的に感受性を調べ、効果の高い薬剤を選ぶことが重要です。

アザミウマ類の感受性検定には、薬剤処理したインゲン葉片を用いる方法が広く使われています。しかし、この方法では葉片の劣化が早く、処理2～3日後までしか効果判定できません。そのため、処理直後の死虫率は低くても、その後遅れて効果が現れる薬剤については、効果を十分に評価できない可能性があります。実際に、遅効的に効果が発現する薬剤では、従来法では効果が低いと判断されても、実際の防除場面では有効であるとの声もありました。

そこで、ヒラズハナアザミウマを対象に、処理7日後まで殺虫効果を評価できる感受性検定法を開発しました。



図1 ヒラズハナアザミウマ

2. 研究成果の概要

県内の促成イチゴ生産ほ場から採集したヒラズハナアザミウマ成虫を用いて試験を行いました。薬剤処理したインゲン初生葉を、水で湿らせた脱脂綿の上に置いた検定容器に供試虫を入れ、処理2日後と7日後に生死を判定しました。この方法により、従来法では難しかった処理7日後まで葉の鮮度を保ちながら検定できました。

また結果を見ると、アフーム乳剤とベネビアODでは、処理2日後には効果が低かった一方、処理7日後には効果が向上しました(図2)。両剤はヒラズハナアザミウマに対して遅効的に効果が発現する薬剤であり、本法はその評価に有効であると考えられました。

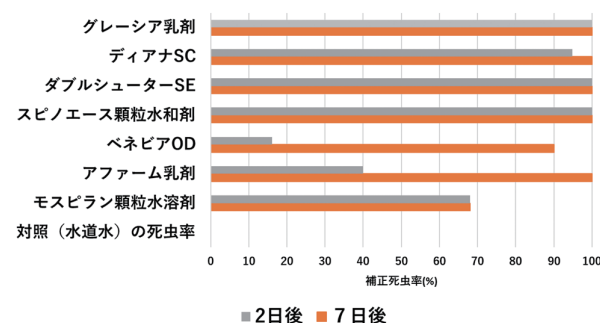


図2 開発した検定法による感受性検定結果

3. 実用化に向けた対応

今後は、本法を県内産地で採集したヒラズハナアザミウマ個体群の感受性検定に活用し、遅効性薬剤を含めた防除薬剤の適切な選定に役立てます。

(環境・病虫害防除科 藤森颯太)